



unesco World Heritage site Jomon Prehistoric Sites in Northern Japan

世界へ発信！

unesco Global Geopark

2つのユネスコ遺産

■問合せ 世界ジオパーク・縄文世界遺産推進室(☎ 82-3663)

入江貝塚で体感！冬の竪穴住居

縄文時代の冬の暮らしは、どれほどの寒さに耐えるものだったのでしょうか。北海道の厳しい気候を思うと、つい「縄文人は相当つらかったはずだ」と想像してしまいます。実際のところを体感してみようと、1月24日に入江貝塚の復元竪穴住居へ行ってみました。

この日は入江・高砂貝塚館の避難訓練や消火訓練を実施する「文化財防火デー」も開催し、参加者の皆さんと一緒に入江貝塚へ向かいました。

復元竪穴住居では中央の「炉」で火を焚きました。この日の気温はマイナス5℃でしたが、住居内は15℃まで上昇していました。外との気温差が大きいほど暖かく感じるといわれています。例えば、マイナス40℃にもなる北極圏に暮らすイヌイットは、雪と氷で家をつくり、家の中は0℃ですが、外との気温差が40℃もあると、0℃の室内も暖かく感じるそうです。縄文時代の冬も、この気温差を利用して、意外に快適に過ごしていたのかもしれない。



快適な竪穴住居の中



煙出しの窓

実際に竪穴住居の中に入るとじんわりと暖かく、煙も思ったほどこもっていませんでした。入口の上部にある窓からうまく煙が抜けているようです。むしろ、わずかに漂ういぶされた匂いが、当時の生活を想像させてくれます。これくらいの体感なら、冬でも暮らしていけるかも？と感じました。

とはいっても、現代の私たちは当然、ダウンジャケットや化学繊維の防寒着をしっかりと着込んでいたので、当時とは条件が異なります。ただ、縄文人も動物の毛皮を利用していたはずで、現代人が想像するよりもずっと現実的に、冬を乗り越える術を身につけていたのかもしれない。

実際に体感してみると、縄文の冬が単なる厳しさだけでは語れないことを実感しました。季節が春へ向かう今、自然とともに暮らしていた人々の知恵が、静かに息づいているように思えます。

